

「私」をつくる記述 ——満洲における雑誌メディアと自己言及のテキスト——

大岡 響子

1. はじめに

「婦人雑誌」というジャンルは、日本で最初に刊行された婦人誌『女学新誌』（1884年創刊）を皮切りに、明治20年代以降「女性」が読むメディアとして浸透していき、大正・昭和を通じてその形態を盤石のものとした。日露戦争以後、初等教育の普及と浸透は、雑誌を購読する読者の存在を下支えし、言文一致という新しい言語感覚の普及は、雑誌メディアの大衆化を促した。こうした背景のもと興隆した婦人雑誌というジャンルは、女性が読むものを一般雑誌とは別のジャンルとして取り出し、女性の読書空間をつくりあげたり。『婦人画報』（1905年創刊）、『婦人世界』（1906年創刊）、『婦女界』（1910年創刊）などが相次いで創刊され、大正期になると読み易く、実用的な雑誌の代表格である『主婦之友』（1917年創刊）と『婦人倶楽部』（1920年創刊）が登場する。

婦人雑誌を分析対象とした先行研究では、そもそも女性をターゲットとして編集された「婦人雑誌」の特質も手伝って、ジェンダー論的視点が主題化あるいは内包される傾向にある。小山静子²⁾、木村涼子³⁾、牟田和恵⁴⁾による研究は、婦人雑誌を分析対象あるいは論点のひとつしながら、近代的な主婦像・家庭観の成立とジェンダー規範の関係性や国民国家が要請する女性のジェンダー規範の構築について論じている。また、女性の「国民化」という観点は上述の先行研究と共通するが、特に戦間期のナショナリズムに婦人雑誌がどのように取り込まれ、またそれに寄与したかについて論じたものに四方由美⁵⁾、若桑みどり⁶⁾、右田裕規⁷⁾の研究がある。

そのほか、大正期・昭和期の婦人雑誌の広告などを分析し、婦人雑誌と消費文化の興隆の関連を論じた石田あゆ⁸⁾の論考、加えて、主婦とモダンガールという近代日本の女性の異なるあり方がどのように消費文化と関連していたのかについて論じた前島志保⁹⁾の論考は、読者でもあり、商品経済の消費者でもある女性とメディアのいち形態である婦人雑誌との関係を論じた示唆に富んだものである。

本稿が特に示唆を受けた論考としては、先述した木村涼子の論考と先述したものとは別の石田あゆの論考¹⁰⁾がある。木村は、『主婦之友』をはじめとした婦人雑誌のイデオロギー装置としての機能を明らかにすることを主眼としつつも、読者と雑誌メディアの接点である「投稿」に言及し、限定的ではあるがメディアの受け手である「読者」の能動性に注目している。雑誌と読者の間にある双方向的な関係性を「環流」と名付け、婦人雑誌をジェンダー

の「つくり手」＝イデオロギー装置と位置づけながらも、情報を一方的に発信するメディアとその情報を一方的に受け取る読者、という権力関係の構図では捉えきれない、両者の双方向的な関係性への視座を提供したといえる。加えて、女性の読書のあり方の多様性を教養派の『婦人公論』と実用派の『主婦之友』の比較から論じた石田あゆみの論考がある。この論考は、実用記事中心の『主婦之友』の読書のあり方が、雑誌を「読む」だけでなく記事内容を実際に試し、時には自らの試みを投稿し、読者講習会¹¹⁾に参加するという日常生活と連動する実践を呼び起こすものであったことを明らかにし、能動的な「読み方」をする読者の存在を論じている。

これらの先行研究において、単に情報を受容する者としての読者像とは一線を画す新たな読者像が提示されたといえる。しかし、木村の論考では、投稿記事は本来社会的評価の対象とは成り得ない、家事や日常の些末な工夫に対する社会的評価を与える場として結論づけられ、機能的な側面が強調されている。そのため、読者による記述のあり方や書くという行為自体の意味合いについては検討されていない。石田の論考では、雑誌の「読み方」が主題であるため読者による投書や投稿は資料としてのみ活用されている。

投稿記事という形でメディア空間に書き込まれた「読者」たち（読む以外の行為を行う主体でもあるが便宜上「読者」と表記する）の生活世界の断片をより詳細に考察していくことは、近代日本においてメディア空間と日常の生活世界の関わりを考えていくうえで必要なことだと考える。婦人雑誌の読者たちにとって、裁縫や料理、家計といったテーマで募集された投稿記事を書くことは、すなわち、自らの生活世界のテキスト化であり、<書く自分>と自らによって<書かれた自分>が意識化される自照性を伴った行為でもあったといえるのではないだろうか。

そこで本稿は、1943年より刊行された『主婦之友』満洲版を分析対象とし、なかでも一般読者による投稿記事を扱う。満洲版を対象としたのは、日本と被植民地との間には膨大な書物の往来があったことは既に指摘されているものの¹²⁾、先行研究では看過されがちであった婦人雑誌もまた大正期、昭和期を通じて既に国境を（内地／外地）超えて流通するメディアであったこと考察し、そのあり様を論じるためである。

満洲版において独自に募集され、掲載された投稿記事の記述から、以下の点を考えていきたい。投稿者たちが現地での生活や自らの日常をどのように書き、書くことによって投稿者たちの生活世界はどのようにメディア空間と接していたのか。また、「外地」満洲に暮らす「読者」たちにとって、「外地」と「内地」の境界線はどのように立ち現われていたのか。

2. 満洲におけるメディア空間：新聞・雑誌

『主婦之友』満洲版に論を進めるまえに、満洲における日本人による刊行物の実情を概観しておきたい。1905年7月、満洲ではじめて日本人による新聞・『満洲日報』が発行された。日露戦争中に日本軍占領下の営口において中島真雄が創刊したものである。日露戦争終

結後、大連への日本人渡航の急増に伴い大連において新聞の創刊が相次いだ。1905年10月創刊の『遼東新報』、1907年11月創刊の『満洲日日新聞』、1906年10月創刊の『盛京時報』、1908年10月創刊の『泰東日報』などがそれである。『盛京時報』と『泰東日報』は日本人による経営であったが、中国語新聞だった。『満洲日日新聞』は、創刊当初南満洲鉄道株式会社（満鉄）の機関紙として発行されたが、表向きには東京印刷社長星野錫を社主とする民間紙とされた。南満洲鉄道株式会社が公に出資者として社主となったのは1911年8月のことであった。この時期に満洲において発行された日本人経営による新聞は、全て領事館もしくは関東庁の補助金を受けていた¹³⁾。

1927年10月、『満洲日日新聞』（『満日』）と紙面を競い合うこともあった『遼東新報』が『満洲日日新聞』に統合されたことを契機に、満洲の新聞界は満鉄の傘下に入っていく¹⁴⁾。満洲事変後、満洲の言論界は統制の道へと歩を進めていくことになる。関東軍は1932年「言論通信機関取り扱い方に関する打ち合わせの会」を発足させ、毎月の会合で①国論統一のための国策通信機関として通信社を設立すること、②関東軍自ら新聞をつくること、③有力紙を買収し言論界をひとつの中央組織のもとに統一すること、④大連で発行していた『満日』を奉天に移転すること、などの基本方針を打ち出し、この方針に沿って関東軍は国策機関として満洲国通信社（国通）を設立した。その後、満洲の言論統制を目的とする満洲弘報協会が1936年に設立された¹⁵⁾。満洲における言論は、1932年に制定され、その後数回に渡って改正された出版法によって管理・統制された。国家の存立を脅かすもの、外交や軍事上の機密に関するもの、民心を惑乱し財界を攪乱する恐れがあるもの、などの項目を掲げ、そうした出版物の掲載を禁止した¹⁶⁾。

同時期の満洲における雑誌の発行状況は、1935年には27誌、1939年には252誌、1940年は最も多く約300誌の雑誌が発行された¹⁷⁾。1935年と1939年の発行数にかなりの差があるのは、1937年の満洲国における治外法権の撤廃、つまり、満鉄関連機関の満洲国への移譲により、民間出版物が急速に増加したことが影響している¹⁸⁾。満鉄委員会が発行する『協和』（1916年創刊）や満洲文化協会¹⁹⁾が発行する『満蒙』（『満蒙之文化』の改題、1920年創刊）、『満洲日日新聞』調査部が発行した『経済満洲』（『経済満日』の改題、1932年創刊）などである。『協和』は満鉄社内の業務改善に関する評論や社員福祉、家庭生活に関する内容を中心に誌面作りがされ、満洲で最も発行部数が多い雑誌であった²⁰⁾。これらの雑誌は、満鉄や満洲文化協会という国策機関や半官半民の協会が刊行したもののだが、『月刊満洲』や『満洲評論』などの民間刊行による雑誌も少なからず存在した²¹⁾。

ここでは満洲において官民間問わず日本人が刊行した新聞と雑誌をかなり大まかではあるが紹介した。満洲で流通していた出版物は、先に紹介した満洲において刊行されたもののほかに、外部から流入してくるもの多かった²²⁾。そこで、次項では外部から満洲へと流入する出版物に対して科された規則がどのような内容であったのかを確認する。

3. 満洲における雑誌流通状況「関東州及南満洲鉄道付属地ニ輸入若ハ移入スル出版物取締規則」

満洲で刊行される新聞・雑誌・普通出版物以外にも、外部から現地に流入してくるものも多く、1939年4月の時点では日本内地で出版された新聞64種(2万3,000部)、雑誌297種(6万2,000部)にのぼったという²³⁾。「内地」や北京・上海など中国本土から移入、輸入される刊行物に関しては、「関東州及南満洲鉄道付属地ニ輸入若ハ移入スル出版物取締規則」(1925年5月施行、1935年5月改正)²⁴⁾の規定の元に行われていた。その後、1931年9月に満洲事変が勃発し、翌年3月の満洲国の成立に伴い、法令制定の主体が関東局から満洲国に変わった。(しかし、関東州は租借地であったことから、満鉄付属地と満洲国との並走状態は続き、この状態は解消されたのは1937年12月の満鉄付属地治外法権撤廃によって、満鉄の多くの施設が満洲国に移管されるまで続いた。)上記取締規則の一部を引用する。

関東州及南満洲鉄道付属地ニ輸入若ハ移入スル出版物取締規則

第1条 満洲国駐劄特命全権大使ハ本令施行地域外ニ於テ発行スル出版物ニシテ主トシテ本令施行地域内ニ於テ発売頒布スルヲ目的トスト認ムルモノハ之ヲ告示ス前項ノ規定ニ依リ告示シタル出版物ヲ本令施行地域内ニ輸入若ハ移入セントスルトキハ発行人ハ左ノ事項ヲ具シ大使ノ許可ヲ受クベシ

第2条 発行人前条ノ出版物ヲ輸入若ハ移入シタルトキハ発売頒布前関東局ニ二部ヲ、関東州庁、発売頒布所地所轄警察署及関東地方院検察局ニ各一部ヲ納ムベシ

第3条 本令施行地域内ニ輸入シ若ハ移入スル出版物ノ掲載事項ニシテ公安ヲ紊リ若ハ風俗ヲ害スル虞アリト認ムルトキ又ハ前二条ノ規定ニ違反シテ輸入シ、移入シ若ハ発売頒布シタルトキハ大使ハ其ノ輸入、移入、若ハ発売頒布ヲ禁止シ又ハ之ヲ差押ヘ第一条ノ規定ニ依ル出版物ニ在リテハ其ノ許可ヲ取消スコトアルベシ

この法令は、関東州および満鉄付属地以外で発行された出版物が当該地域内で発売頒布を行う場合、発行人は題号・掲載事項の種類、発行時期、発行所と印刷所の名称と所在地、そして輸入開始時期とその経路、発売頒布地域や取次人の住所氏名などを届け出たうえで、許可を得なければならないと定めている(第1条)。また、輸入した出版物は、発売頒布前に関東局へ2部、関東州庁・発売頒布地所轄警察署と関東地方院検察局に各々1部ずつ納めなければならない(第2条)。これらの規則に違反した場合、満洲国駐劄特命全権大使の権限によって輸入や発売頒布は禁止され、出版物は差し押さえられ、また第1条の規定によって許可を受けた出版物についても、その許可を取り消すことができるとしている(第3条)²⁵⁾。

満洲での出版物の統制は、満洲国内の出版物に対しては出版法によって、「内地」を含む

外部の出版物に対しては本項で概観した規制によって統制がはかられた。厳しい規則が設けられ、肅々と言論統制が進められていたように見えるが、裏を返せば、厳しい統制が必要なほどの満洲内での出版熱は高まり、そして「内地」の出版物も読みたいという読者たちの欲求が背景にあったと推測できる。

4. 1930年代後半の満洲における『主婦之友』

「関東州及南満洲鉄道付属地ニ輸入若ハ移入スル出版物取締規則」から1930年代半ばには、日本で発行された出版物で満洲へと渡り、統制管理を経て満洲在住者の手許に届いていた状況がうかがえる。この時期に「内地」で出版された雑誌がどの程度流通していたかについて記録した資料に『満洲国現勢 康德6年版』²⁶⁾がある。これを元に、婦人雑誌を中心に整理したのが以下の表1である。

表1 1938年5月調査による日本からの輸入雑誌数

種別	誌名	1938年2月号	1938年4月号
婦人雑誌	令女界	744	753
	主婦之友	26,952	26,728
	婦人公論	5,604	5,401
	婦人倶楽部	16,593	15,176
	婦女界	1,362	1,221
	婦人画報	262	297
	若草	364	378
	娯楽雑誌	キング	26,682
日の出		10,955	10,584
講談倶楽部		11,420	10,584
子供雑誌	幼年倶楽部	4,780	4,574
	少年倶楽部	6,800	5,779
	少女倶楽部	5,045	4,831
その他	改造	2,933	2,713
	中央公論	3,129	3,109

(出典)『満洲国現勢 康德6年版』(466頁)より抜粋・作成

また、同資料では、新京の書店を対象に行われた1935年と1938年12月の輸出版物調査が紹介されており、日本から移入される出版物の急激な増加は、「正に隔世の感」があり、「今後の扱部数は益々猛烈になるものと見られている」と報告されている。『主婦之友』に限っていえば、1935年時点では新京市内の書店4軒において2,739冊、1938年12月時点では市内12軒の書店において45,445冊の扱いがあった²⁷⁾。

1939年の関東州検閲係の調査によると、1930年代後半頃の関東州における「内地」出版

の新聞雑誌の購読数は著しく増加し、新聞 64 種 2 万 3,000 部、雑誌 297 種 6 万 2,000 部に上ったという²⁸⁾。本稿で扱う『主婦之友』満洲版の刊行は 1943 年新年号より始まるが、その数年前の時点で満洲における『主婦之友』の流通が 4 万 5,000 部超あったことは、満洲版創刊を後押しした理由の一つとしてあったであろうことは想像に難くない。

雑誌用紙規制という雑誌出版には厳しい情勢のなか、1943 年新年号を皮切りにわずか 2 年 4 か月間の『主婦之友』満洲版の刊行が始まった。

5. 雑誌『主婦之友』の沿革

大正 6 年に石川武美によって創刊された『主婦之友』は「実用派」雑誌の代表として、「教養派」雑誌の代表である『婦人公論』とともに大正期の婦人ジャーナリズムを牽引し、大正・昭和を通じて部数を伸ばしていった²⁹⁾。発行部数は、大正 6 年の創刊号で 1 万部、大正 9 年には当時の雑誌業界で最大の発行部数を誇る大衆雑誌に成長した³⁰⁾。大正 14 年度の全婦人雑誌の新年号の発行部数は約 120 万部であったとされ³¹⁾、大正 13 年頃には 23、24 万部を数えたとされる『主婦之友』は全婦人雑誌の総発行部数の約 2 割に達する勢いであった³²⁾。

国家による出版物の統制は、1937 年 7 月に警視庁が「時局に関する記事取扱方に関する件」として新聞雑誌等に通牒をだし、「反戦または反軍的言説をなしあるいは軍民離間を招来せしむるがごとき事項」の掲載を禁止したこと、加えて内務省警保局が警視庁特高部長および各府県警察部長あてに「時局に関する出版物取締に関する件」を傳達し、特に取締りを要するものとして「北支事変に関する一般安寧禁止標準」（11 項目）が規定したことにはじまる。同年 10 月には出版関係 54 社と検閲当局の「出版懇話会」が発足し、これが戦時下出版統制の強化される端緒となったとされる。

婦人雑誌への干渉は、1938 年 5 月に内務省警保局が各出版社に対し「婦人雑誌ニ対スル取締ノ方針」を示したことに始まり、「卑俗ナル描写」を禁止し、「健康ナル羞恥心」が提唱された。また、商工省命令により、1939 年 8 月から雑誌用紙は 25% 減じられるようになった。

上述した出版・雑誌統制の状況下で、雑誌の総合整理がすすめられ、太平洋戦争下では 50 数種あった家庭婦人関係の雑誌は 15 種に統合された³³⁾。戦争反対や女権拡張などを掲げる教養雑誌が廃刊に追い込まれるなか、『主婦之友』は国策に沿った内容を掲載することで廃刊を免れたわけだが、本稿で扱う満洲版もまさに国策機関との連携によって誕生したといえる。こうした点において、戦争協力の責任を指摘されることの多い『主婦之友』だが、良きにつけ悪きにつけ「大衆的」であることを創刊以来の理念とし、1943 年 7 月号は創刊以来の最大発行部数 163 万 8,800 部を記録した。戦時下でこのような「ベストセラー」がうまれた背景には、出版統制による少数出版物の一極集中化ともいえる特殊な寡占状況において限定された出版物しか市場に出回らなくなった結果、読者が少数の出版物に集中したとい

う現象が指摘されている³⁴⁾。

『主婦之友』の体制迎合的な編集姿勢は、つとに指摘されてきたが、創刊者である石川の出版界における立ち位置がそうした雑誌の傾向に影響を与えていたともいえる。1943年は、国家総動員体制の地固めと、あらゆる面で戦時統制の締め付けが一段と厳しくなった年である。同年、石川は、内閣情報局の監督下で出版企画の事前審査や印刷用紙の割当査定を行い、出版界の統制を行う機関であった出版会³⁵⁾の理事に就任する。加えて、出版物の一元的配給機構である日本出版配給株式会社（日配）の配給部長にも就任し、間もなく社長となる。つまり、次項で論じる満洲版創刊年に、石川は雑誌の用紙割当を決定する出版会と出版物の配給を統括する日配の社長を兼任することになったのである³⁶⁾。

この出版会理事、日配社長の兼任という大役は、それ以前から出版業界において体制的な発言をしていた石川が引き寄せたものだとはいえるだろう。日配社長に就任する2年程前の1941年には、日配機関紙『日配通信』において石川は、雑誌が薄くなるのは時局が厳しくなった証拠であって、ますます雑誌の使命が重くなったことを意味するといひ、「雑誌や書籍は思想戦の弾丸」であるという考えを示している³⁷⁾。

満洲版の創刊は、こうした石川武美の出版業界での立ち位置とおそらく密接に関係していた。1930年代後半の満洲において、『主婦之友』の読者が相当数いたであろうことは前項で述べたが、情勢が益々厳しくなるという時期に満洲読者のためだけの満洲版をなぜ創刊できたのかは、当時の出版業界の中枢にいた石川武美の人脈や社会的立場抜きには語れないだろう。

6. 『主婦之友』満洲版の刊行

満洲版³⁸⁾は、1943年新年号に始まり、1945年4月号まで続き、合計で28冊が刊行された。主婦之友社社史によれば、「在満日本人読者のために、現地取材を主としたグラフ、記事を16ページばかり増加添付したもの」であり、「満洲版発行のために、記者の一人を現地に派遣して、記事取材面と販売網などをくわしく調査した」とある³⁹⁾。その形態は、内地版『主婦之友』に合本されるようなかたちだったが、用紙の制約からか内地版の記事を数本抜き、その代わりに満洲版独自の記事が掲載されたものが満洲に送られたようである。内地版には満洲版の記事は収録されておらず、目次上でのみ満洲版の記事題目がみられる、といった状況であった。発刊後、16ページを確保できたのは1943年新年号から4月号までで、それ以後は8ページ前後での紙面づくりとなった。

1943年新年号の『主婦之友』巻末の社告に次の記事が掲載された。以降、下線は筆者による。

「満洲版の編輯について」主婦之友社は在満洲全讀者のために、新年號から満洲版を編輯することになりました。關東軍報道部、政府弘報處、満洲書籍配給株式會社、満洲出

版文化普及聯盟の御協力を仰ぎ、情報局日本出版文化協會の御指導の下に編輯されます。當分の間、十六頁を内地版記事と入れ替へ、特に現地に必要な生活記事を収容いたします。

この社告からは、満洲版が軍や政府との協力関係のもとに発行される運びとなったことがわかる。満洲書籍配給株式会社（満配）は、満洲国内での書籍・雑誌出版の活性化および輸入出版物の一元統制と適正配給をはかることを目的に1939年12月に設立された国策機関であり、1941年に日配と満配が協定を結び、内地出版物は日配を経由して満配に輸出されることになった⁴⁰⁾。ほかに、巻末に掲載される「編輯局日記」において、満洲版の編集、発行、および売れ行き等に関して、当時の状況が推察できる記述をみることができる（表2）。

表2 『主婦之友』における満洲版関連の記述

満洲関連記述			
年	月	掲載場所	内容
1943	1	編輯局日記 10/26（月） 晴	『主婦之友』満洲版がいよいよ新年號から實現される。樹ならば挿木の満洲國は、在滿同胞が土となり、大和魂でその根を培つてこそ大木となる。満洲版編輯の精神もここにある。 <u>關東報道部も政府弘報處も在滿讀者も滿幅の協力を寄せられ、東條首相夫人からは創刊お祝ひに玉稿を頂ひた。</u>
	3	編輯局日記 12/21（月） 晴	満洲版はすばらしい大反響だ。發賣日に全滿賣切れとの電報である。 <u>満配の田中社長や満洲出版文化普及聯盟本部からも祝電を頂いた。紙は減っても満洲版はつつけて行きたい。</u>
	4	編輯局日記 2/10（水） 晴	満洲から歸った記者の報告によると満洲版第一輯の新年號は満洲の書店始つて以来の大反響だったといふ。隣組の常會では満洲版記事の實行を申合せたといふことだ。よき雑誌があつても、よき讀者になれないなら残念だ。もつともつとよき愛讀者になりたいとねがってゐるとの熱心なお便りもある。
	5	表紙 （満洲版）	「必ず回讀してください。前線の兵隊さんは一本の煙草も分けてのみます。私達も一冊の主婦之友十人二十人で讀み合ひませう。
1944	1	編輯日記 11/20（月） 晴	『主婦之友』は満洲國政府の御援助により新年號から満洲版を八頁に擴張し、四頁だけ内地版より増頁することになった。 <u>日滿一體、決勝生活の確立に編輯總力を捧げる覚悟だ。</u>

（出典）『主婦之友』内地版及び満洲版から抜粋

社長である石川の出版業界での立場も手伝って、特に体制迎合的であったといえる『主婦之友』編集局が「樹ならば挿木の満洲國は、在滿同胞が土となり、大和魂でその根を培つて

こそ大木となる。」とその創刊意図を語っているように、満洲版は満洲というローカリティを意識しながらも、あくまで体制迎合的な姿勢が示されている。満洲版を手にとった読者たちは、こうした雑誌メディアとどのように接し、活用していたのだろうか。

7. 満洲版における投稿記事

満洲版では、本誌とは別に懸賞投稿記事が募集された。「満洲の愛読者の家庭の実験」と題した投稿記事は、「外地」において生活を営む上での工夫を読者が披露する場であると同時に、満洲版読者たちが各々の工夫や「実験」を相互に知ることができる場を提供した。以下の表3は、満洲版の投稿記事の割合を示したものである。号によってかなりばらつきがあるが、時には満洲版の全ページが投稿記事であったことは、編集側も満洲というローカリティを強く意識していたことの表れであるといえるだろう。戦局の悪化に伴ってページ数が減り、投稿記事掲載も減少していくが、1944年中盤までは投稿記事に少ないページ数の4割前後が当てられている。満洲版での投稿記事は主に次の5項目で募集されたが、「満洲の子供の教育の苦心」や「満洲のお菓子の作り方」などのテーマで新たに募集がかけられることもあった。

「満洲の愛読者の家庭の実験」（1942年9月号～12月号の懸賞募集広告より）

- ①満洲生活の家計の実験
- ②満洲の妊娠と育児の実験
- ③満洲で病気を治した実験
- ④満洲の家庭料理の実験
- ⑤開拓村の増産の実験

表3 満洲版における投稿記事の割合

年／号	投稿記事(頁)	満洲版記事(頁)	投稿記事の割合 ⁴¹⁾
1943年新年号	7	16	43%
1943年2月号	9	16	56%
1943年3月号	7	16	43%
1943年4月号	4	16	25%
1943年5月号	3	8	37%
1943年6月号	3	8	37%
1943年7月号	4	8	50%
1943年8月号	4	8	50%
1943年9月号	3	8	37%
1943年10月号	3	8	37%
1943年11月号	3	8	37%

1943年12月号	0	4	0%
1944年新年号	6	6	100%
1944年2月号	3	6	50%
1944年3月号	7	7	100%
1944年4月号	6	6	100%
1944年5月号	6	6	100%
1944年6月号	0	6	0%
1944年7月号	0	7	0%
1944年8月号	2	5	40%
1944年9月号	0	5	0%
1944年10月号	0	6	0%
1944年11月号	4	4	100%
1944年12月号	0	8	0%
1945年新年号	2	8	25%
1945年2月号	0	8	0%
1945年3月号	0	8	0%
1945年4月号	0	8	0%

実用派雑誌の代表格『主婦之友』は、満洲版においても実用的な記事掲載を目指していたことが、投稿記事を重視していたことからうかがえる。しかし、投稿者ははたして「実用的」な情報を書いていたといえるのだろうか。投稿者たちにとって、投稿記事を書くことは、社会的な評価の対象とならない料理や家計の工夫に対して、評価を受ける唯一の方法としてのみ活用されていたのだろうか。次項では、投稿記事における記述のあり方を詳しく見ていくことで、投稿記事を「書くこと」に埋め込まれた作用を考察し、誌上における投稿記事そのものの存在を再度考えてみたい。

8. 『主婦之友』満洲版における投稿記事

これまで見てきたように、『主婦之友』は出版物統制が強まっていた1930年代後半には、既に満洲において4万5,000部超の流通があったこと、関東報道部や満洲書籍配給株式会社などの協力のもとで満洲版刊行が始まったことから、体制迎合的なメディア空間は「内地」「外地」の別なく読者に共有されていたといえる。本誌も満洲版も同様に体制迎合的な記事のみを掲載することを目的としているのであれば、あえて満洲版を刊行する必要もなかったようにも思えるが、満洲というローカリティを取り込むことでより強固な体制づくりが目指されたとも考えられる。つまり、満洲版は満洲というローカリティと体制的思想が接触するメディア空間でもあったといえる。本項では、そうしたメディア空間のなかに「書き込まれた」投稿記事を詳細にみていく。

(1) 料理記事に書き込まれる投稿者の生活世界

満洲版創刊号のはじめての投稿料理記事においては、編集側から以下に引用したように好意的な評価が述べられている。

『満洲の家庭料理』募集は非常な反響を呼び、在満各地の愛読者の方々から、それぞれの土地の実情と共に、御自慢の滎陽料理を多数寄せられました。

いづれも零下何十度の極寒の地にあつて、寒さにいぢけず、却って寒さに親しむ心構への溢れた貴いご実験で、料理法ばかりでなく、心持のうへに啓發させられるものが多かつたのは、大変心強い限りでございました。このうちから季節も考へ、主として北滿の雰囲氣のこもつた、温い榮養料理を御参考までに發表いたしました。各地の實情により、お手許の品で適宜にご工夫くださいませ。⁴²⁾

厳しい寒さ、「内地」と異なった食材など「土地の実情」とともに満洲における日常の料理が記述されていたことがうかがえる。また、雑誌側が料理記事において料理法だけではなく投稿者の「心持」にも言及し評価していることは、国策的言説をとることで休刊・廃刊を免れた『主婦之友』の方針、そして体制に迎合的な言説とともに歩むことで創刊された満洲版の編集意図が見て取れる。

雑誌の編集意図は、どの投稿記事を掲載するかという判断に影響を与えるのだということを考えれば⁴³⁾、その意図を読みといていく必要がある。しかし、ここでは投稿記事の記述の分析を通して、「読者」たちが満洲という地において日常的な行為を記述し、雑誌という媒体を通じて自ら／他者の経験が共有される空間に繋がっていくとき、そこにはどのようなメディアと「読者」の関係が立ち現れてくるのかに着目する。

満洲版に掲載された投稿料理記事の記述からは、投稿者たちがロシア、満洲やその周辺地域、朝鮮など異国料理を積極的に生活に取り入れようとしている様子が見て取れる。それは現地食材や調理法、また料理名の記述において現地語由来の発音表記を多くの投稿者たちが用いていることから推察できる。「タージャン漬」⁴⁴⁾、「バリミニイ」⁴⁵⁾、「ペロシキ」⁴⁶⁾、「ピーチャンカ」⁴⁷⁾、「チメントウフ蒸豆腐」⁴⁸⁾、「ホアチュアン葱入り花巻」⁴⁹⁾、「馬鈴薯のチャオヅ」⁵⁰⁾など、ロシア語の料理名は現地語をカタカナ表記で、中国語の料理名はカタカナ表記かカタカナでふりがなを振ってある。

ハルビン在住だとされる堀井かをるは、2年超の満洲版が刊行された期間を通じて、多くの記事が掲載された投稿者のひとりである。以下は、堀井⁵¹⁾の、「ロシアスープ」と題した投稿記事である。

ペチカに燃える赤い火の親しまれる頃ともなれば、買出しなどにはめつたに出ず、ペチカの横に作りつけのドフォスカ（オープン）で、自慢の貯蔵品を使ひ、毎日美味しいロ

シア菓子やら栄養料理を作っています。このロシアスープも、手製のトマトピューレー（トマトの縊詰）を利用した、我が家の人気料理です。（中略）

調味料=にんにくの一球の三分の一、ウクロブ（女郎花に似た、ロシア人の好む香料）十分の一本、（中略）スメターン（代用乳）コップ半杯

市場か満人の肉屋に行くと牛骨を賣つてゐますから、骨の中に髓の澤山あるものを求め、きれいなたはしで水洗ひして鍋に入れ、たつぷりの水からことことと、浮き上るあくを掬ひながら一時間半ほど煮込みます。

スメタナンは原乳を発酵させて、生きた乳酸菌のままを食用にするもので、非常に滋養に富み、病人、子供によいだけでなく、普通一般の料理に使へ何ともいはず風味を出します。

ここでも、オープンのことをわざわざロシア語の発音を用いてドフォスカと表記したり、ロシアの発酵乳食品であるスメタナを紹介したりと、積極的に「ロシア的」なものが記述に盛り込まれている。また、特に注目したいのは、料理法や手順とは直接関係のない記述が見いだせることである。「ペチカに燃える赤い火の親しまれる頃ともなれば」や同人による他の投稿記事の「スガリーの岸邊に鴨や雉が下り立つて来ました。」⁵²⁾からは情景的な記述を投稿者が好んで入れ込んでいたことがわかる。

そのほか、「これは、成吉思汗がヨーロッパから持ってきたといふタール料理ださうですが、寒地ならでは味へない好ましいものです。（中略）ペチカの上には終日お湯がしゅんしゅんと沸つてゐますから、不意の来客や外から歸つてきたときなど、貯へておいた『スープの素』を取り出して熱湯で溶き、ベリミニイを五個とお味をつければ、十分もかからぬうちに用意ができて、冷えきつた身體も心から温まります。」⁵³⁾からは、料理の由来を紹介することで投稿者が知的な環境にあることが暗に示されている。また「お湯がしゅんしゅん」や「冷えきつた身體も心から温まります」など厳しい寒さの描写を通じて、満洲というローカリティとともに、投稿者の生活世界の断片が料理記事に織り込まれている。

こうした記述の傾向は、他の投稿者にも見受けられる。

厳寒期ともなれば主人の獲物の雉子が食卓を賑してくれます。北滿のどこでも獲れる雉子が、鶏肉の半値で買へますし、これをいろいろに料理するのも冬の楽しみの一つです。⁵⁴⁾

家中でペチカを圍んでは、熱いお茶か味噌汁で、ふうふうふきながらこのペロシキを頂きます。⁵⁵⁾

これらの記述において、厳しい満洲の冬や寒さについて書くことは、生活の温かさや家庭

の円満さの表現と表裏一体であるといえる。

以上のことから、料理に関する投稿記事であっても、投稿者には料理法とは直接関係のないことを記述する自由度があったことがわかる。編集側は料理法をなるべく詳細に書くことを求めているが、どのように書くべきかということにまで管理は及んではいなかった。

満洲版の「読者」たちは、ときに投稿者として料理法の記述のなかに自らの生活や周囲の環境に関する情景を入れ込みながら記述し、その書き込まれた生活世界の断片は誌面を通じて満洲版「読者」たちに共有されていた。料理記事にこうした生活世界を〈書く〉ことによって、手製のスープで温まるのは「冷えきつた身体」だけでなく、生活そのものであることを示し、投稿記事のなかに温かい家庭生活を浮かび上がらせたのだ。つまり、投稿記事は、実用的な料理記事であると同時に自照性をともなった自己言及的かつ自己提示のテキストであったといえる。

(2) 編集の強化と「科学的」記述

しかし、堀井かをるに代表されるような自由度の高い記述は、常に編集の強まりによって影響を受け、編集側が望ましいとするであろう記述に引き寄せられていく状況にあったことは看過できない。1943年の創刊時から8月号までは一般読者からの投稿記事のみで構成されていた投稿誌面に、同年9月号から所謂プロの料理家による料理記事が混在するようになる。1944年新年号以降は、プロ料理人や料理研究家によるレシピの掲載が徐々に増え、投稿者による投稿記事は減少してく⁵⁶⁾。また、誌面において明確に述べられているわけではないが、1944年2月号以降、一般読者による投稿記事に対して、どのようにすればビタミンを損なわないか、栄養を効率よく摂取するために留意すべき点はなにか、について編集側からのコメントが差し込まれるようになったことが見て取れる。

こうした「科学的」記述へ満洲版の編集が傾倒していった背景には、戦局の悪化によって「内地」から満洲への物品輸送が停止したことがあげられるだろう。1943年9月号の「満洲の戦時生活——現地座談會——」には、冒頭で記者が次のように書いている。

大東亞戦争の深刻化につれて、いよいよ今年の九月からは、内地から満洲へ物が一切来ないことになりました。これからの満洲の戦時生活は、自給自足の生活を一そう徹底させてゆかねばなりません。

当該記事は、関東軍報道部長・長谷川宇一中佐を司会に、6名の満洲在住の有力者を夫にもつ女性たちが座談会形式で議論をするというものである。ここで長谷川は以下のように述べている。

戦時生活は、単にやりくりしたり、切り詰めたりして間に合せてゆくといふ消極的なも

のではありません。例へば今まで十撮つてゐた榮養を、七つか八つに減つたままで我慢してゆく——また減つた分を何とか埋め合せて今までと同じ十にする——(中略) 戦時下に於ては、この七つか八つのもので十一か十二、或はそれ以上の榮養を撮つて、戦争を遂行するための體力を増強しなければならぬ。

榮養をいかに効率よく摂取するかに主眼が置かれたことによって、料理投稿記事の「科学的」記述への傾倒が強まっていったことが推察できる。こうした「科学的」記述の要請は、投稿記事に編集者が榮養学的見地からコメントをつけたこと、また専門家たちによる記事を多用し始めたことによって、投稿者たちの自由な記述を掲載する空間を物理的に圧迫していった。

それでも、「五六月ともなりますと、満人の女子供が總出で、手に手に籠を提げて野草や木の花を摘んでゐる姿が見受けられます。満人の食べ方を参考にして、いろいろ試みましたが、思ひがけず美味しく頂けたり、また失敗もいたしました。しかし、失敗しても懲りずに工夫し、研究してゆけば、新しい調理法も自然に會得できます。」⁵⁷⁾には、満洲の情景と自らの創意工夫を厭わない姿勢が書き込まれている。また、体制に迎合的な記述ではあるものの、以下の堀井かをるによる記述は文学的な装いすらまとっている。

清々しい初夏の朝に、榆の花をしごいてきて水洗ひし、用意の味噌汁にぱっと入れて、一噴きしたところを供します。故國を偲ぶ味噌の香に、自家製豆腐の純白と狐色の油揚、榆の花の緑の色、ほのかに甘い榆の香は、正に日満一體の食味です。⁵⁸⁾

上記の堀井かをるの記事は、「食生活決戦」のための工夫を紹介する投稿記事に掲載されている。食糧の自給自足を推進するための記事においても、単なる調理上の工夫や榮養への配慮の記述に留まらず、「日満一体」というスローガンを味噌汁の描写に織り込み、記述している。こうした実用性が求められる記事のなかに書き込まれた、非実用的な、時には心理的な描写からは、従来指摘されてきた実用派雑誌『主婦之友』の読者像とは異なった「読者」のあり様が見えてくる。文章のジャンルはどうであれ、『主婦之友』には<書くこと>に工夫をこらし、自らの生活世界を<書くこと>を望む「読者」がいた。それは、一般読者が文芸誌に小説や詩を書き、投稿する意図とは違ったかもしれないが、<書くこと>によって自らの生活が対象化されたという点は同様であったと指摘できるだろう。

(3) 家計や育児に関する投稿記事に書き込まれる投稿者の生活世界

<書く>自分と<書かれた>自分がより明確に考察できる事例が、次の投稿記事である。満洲版の投稿記事において、最も多く掲載されたのは料理記事であったが、家計や育児に関する投稿も掲載された。料理投稿記事が3、4ページに10人前後の投稿を掲載したのに対

し、家計や育児に関する投稿記事は2、3ページに基本的には1人の投稿者の記事が掲載された。そのためやや長い記述となるが、「満洲生活者の家計の実験」への投稿記事として掲載された「最低生活を實行して貯蓄に邁進する家計の実験」(南満・佐藤桂子)⁵⁹⁾を抜粋して紹介する。

私は一軍属の妻でございます。昭和十五年十二月末、一か月の休暇で帰国した主人に伴はれ、さまざまな不安を抱きながら渡満して、南満田舎町のささやかな家庭生活に入りました。渡満途上の車中で主人といつての将来について話し合ひ、國家が長期建設を目指して邁進してゐるときゆゑ、自分達の生活もまた長期建設で行かう、それには最小限度の予算生活の実験をと、前途への希望ではちきれる思ひでした。當時主人の俸給は、手當も入れて百円に満たない少額でしたが、生活には恵まれない代りに、お国へ直接御奉公のできる一員であることを誇りに思ひ、どこまでも主人に後顧の憂なく勤務して頂きたいと、考へてをりました。やがて家庭に落ちついたとき、思ひがけなくも主人に負債のあることを知りました。薄給の身に、五百円を超える負債の高は、決して少いものではありませんので、一時はぼんやりと、途方に暮れてしまひました、あまり落胆してゐる私を見て、主人もさも濟まなさうに打ち沈むだけでしたが、その姿をみたときに、急に何物かに揺り動かされたやうに強い心が湧き起りました。考へてみれば、良人は早くに両親を失ひ、身寄せへない氣の毒な身の上、いまここで心から勞り勵まして、没落した家を何とか立派に再興してもらはなければならないのだ、こんなことでくらゐ氣を落さず、黙々と長期建設にかからう、一切を自分一人の胸に秘めて、立派に借金を返済してみせよう、と心に決めると氣も晴れ晴れして、むしろ一そうの希望が湧いてきました。そして、早速御近所の方にお願ひして、お裁縫をさせて頂いて増収をはかる一方、勤めて節約することに心がけました。満州では奥様方は、お風呂や炊事の水を大抵満人の水汲夫に汲ませてをられますが、私はまづこれを一切じぶんでやることにしました。内地と違ひ、南満とはいへ冬の乾季は一通りではないので、水汲も容易ではなく、そんなことまでする私を満人すら、侮蔑的な眼差しで見つて笑つてゐました、満人は、このやうな仕事は最も下級者のする恥しいことと思つてゐるので、無理もありませんが、私はしみじみ國民性の相違を知り、早く満語を覚えて、この人達と心から話し合ひ、勤勞の尊さも納得させてやりたいなどと思ひつつ、努めて明るい気持ちで毎日を楽しんでおりました。こんな風に懸命に努力して、内職では月三十円、ときには四十円も上げることができましたので(後略)

この後、一年後には借金を返済し、貯金にまで手が回るようになり、夫は出世し、長男まで出産したことが報告される。投稿記事のテーマは家計の工夫を発表することにあるが、上記の投稿記事はもはやちょっとした一人称小説のようである。投稿記事誌面のおおよそ半分

を、こうした具体的な家計報告や節約の内容ではない叙事的な自分語りの記述が占めている。具体的な家計の内訳が説明された後に、次のような節約のコツが紹介され、満洲生活への前向きな心情で記事は締めくくられる。

家の周りの空地进行を耕して、ちょっとした野菜は作り、去年は自家栽培の野菜を漬物にして冬中頂き、大へん助かりました。冬は市場で求めた凍った葱や赤大根の切捨てる根本を、水盤などに入れて、暖房のある部屋の窓際におき（中略）ときどき摘み取ってお味噌汁に浮かせたり、酢の物に散らせたり、ときにはおさしみのつまなどに用ひておりますが、趣があるとよろこばれます。

（中略）満洲は物価が高いので、百円前後の月給の人には生活がたたないだらうなどと、よく言はれますけれど、自分さへやつてゆこうと決心すれば、内地よりよほどのんびりと立派に楽しく生活することができると思ひます。満洲こそは、私共の安住の地であり、また今後ますます堅実に盛り育ててゆかねばならない土地だと思ひ、日々の努力をつづけてをります。

この記述には、投稿者である佐藤桂子が、期待を胸に新天地・満洲での生活を始めるも、夫の借金という苦難に見まわれ、挫折しそうになりながらも奮起し、自らの努力で苦難から脱し、家族との幸せな生活を打ち立てていくというビルドゥングスロマン的なストーリー性がある。投稿者は、〈書く〉自分＝書き手でありながら、〈書かれた〉自分＝物語の主人公でもある。投稿者は、〈書くこと〉によって自らの生活世界を言語化し、物語性をもった〈書かれた〉自分をメディア空間に提示したといえる。投稿者である佐藤は、自らがコントロールできない社会的事象に投げ込まれ、そうした社会的事象と不可分の私的事象をテキスト化する場として投稿記事を利用している。満洲というローカリティは、記述のなかで、対象化された社会的事象あるいは環境として現れながらも、投稿者の生活世界の一部と不可分に融け込んでいる。

むすび

『主婦之友』満洲版における投稿記事は、「満洲の愛読者の家庭の実験」という大きなテーマが掲げられ、「満洲生活の家計の実験」、「満洲の妊娠と育児の実験」、「満洲で病気を治した実験」、「満洲の家庭料理の実験」、「開拓村の増産の実験」などの個別のテーマごとに掲載された。本稿では、「満洲生活の家計の実験」と「満洲の家庭料理の実験」において発表された投稿記事を詳細に考察することで、個別テーマには直結しない記述が投稿記事において見いだせることを指摘した。

家庭料理の料理法や節約のコツを披露することが主目的とされる記事の中に、テーマとは直接関係のない記述が、時には文学性を志向する記述が見出せることは従来指摘されてきた

実用派雑誌『主婦之友』像とはやや異なった印象を与えるかもしれない。そうした自由な記述から垣間見えるのは、書くという行為を通じて自らの生活世界を描写し、満洲あるいは「外地」というローカリティと意識的に向き合い、生活していく投稿者たちの姿である。

1943年の満洲版刊行開始以前から、満洲及び関東州において『主婦之友』をはじめとした「内地」発行の雑誌類が相当数流通していたことは既に述べた。そうした出版物の流通という側面においては、出版物を入手する難しさの違いはあるものの、「内地」と「外地」は同じものを読み、同じ雑誌に投稿することが可能であったという点においてメディア空間を共有していたといえるだろう。流通する出版物は「内地」と「外地」をつないだ血管であった。

『主婦之友』もそうした血管を通った血液の一滴であったわけだが、満洲版の刊行は共有されたメディア空間において、「読者」たちに満洲というローカリティを意識化させるだけでなく、ローカリティを自らの生活世界と不可分なものとして認識させることに繋がったとはいえないだろうか。例えば、ロシア語や中国語などの生活環境にある言語を用いながら異国料理を積極的に導入する料理記事の記述や、一方で現地食材を使いながらも「内地」の味覚に近づけようとする下記の記述には、満洲というローカリティへの意識が見て取れる。

しょうげん ま
廠元磨は満洲産の茸の名で、内地の椎茸に似てをり、冬季ビタミンの不足しがちな当地域の食物として盛んに奨められてゐる食品です。秋頃、満人の市場で容易に手に入りますから、これを適量乾燥して、袋に入れて吊るしておくか、罐に保存して、冬中頂きます。このスープは大へん経済で、醤油で味をつけると内地の吸物と變りません。⁶⁰⁾

満洲版「読者」たちは、編集側の意図や意向という制限に巻き取られながらも、自らの生活世界を<書くこと>によって満洲というローカリティに対峙し、自己言及的テキストを介してそのローカリティを自らの生活世界の一部に溶かし込んでいくとともに、自らを物語り、記述のなかで「私」あるいは「私」の生活を確立していった。流通や言論という点において「内地」と「外地」のメディア空間は、出版統制や配給の統制を介して結合していた。しかし、そうしたメディア空間の結合に一役買ったであろう体制迎合的な雑誌『主婦之友』満洲版の投稿記事の記述からは、画一化された「国民」や「私たち」ではなく、ローカリティを意識的に捉え、ときに内在化させながら「私」あるいは「私の生活」を確立していく投稿者たちの姿が浮かび上がる。

『主婦之友』は「内地」と「外地」のメディア空間をつなぎながらも、満洲版の刊行によって共有されたメディア空間のなかに満洲というローカリティを読者の意識に引き込んだといえるだろう。そして、そのローカリティは、実用的な記述、つまりテーマに沿った形式的な記述においてではなく、形式外の自由な記述において投稿者たちの生活世界と融け合っていたのである。

註

- 1) 牟田和恵によれば、明治初期においては「家庭」に関する話題は男性向け、女性向けの区別がなく総合雑誌の重要なテーマとして取り上げられていたが、1890年頃を境に家庭に関する話題は「もっぱら女性を対象として女性のみにかかわるものとして語られ」、婦人雑誌の領域として囲い込まれていった（『戦略としての家族：近代日本の国民国家形成と女性』新曜社、1996年、54頁）。しかし、『主婦之友』はもちろん主たる読者は女性であったものの、男性読者を少なからず意識していたことが巻末の投稿欄にしばしば男性が登場していることから推察できる。また、永嶺重敏は、男性が婦人雑誌の二次読者（女性が購入した婦人雑誌を家庭内の男性が読むこと）として相当数いたことを指摘している（『雑誌と読者の近代』日本エディタースクール出版部、1997年、187-188頁。）加えて、時代はかなり下るが、主婦之友社発行の小冊子『なぜ「主婦之友」が一番多くの人に読まれるか?』には、「『主婦之友』には、毎号夫婦円満の秘訣が発表されています。楽しみながら、よい夫、よい妻になる道が示されています。」という編集部による記述や米国カリフォルニア州在住の読者からの「本がまいりますと主人ととりあいつこして読みますの。最初は頑固で婦人雑誌ナンカと申していました主人も、いつの間にやら『主婦之友』の愛読者になってしまいました。」という投稿が紹介されている（主婦之友社『なぜ「主婦之友」が一番多くの人に読まれるか?』主婦之友社、1951年、7頁、19頁）。
- 2) 小山静子『良妻賢母という規範』勁草書房、1991年。『家庭の生成と女性の国民化』勁草書房、1999年。
- 3) 木村涼子『<主婦>の誕生：婦人雑誌と女性たちの近代』吉川弘文館、2010年。
- 4) 前掲、『戦略としての家族』。
- 5) 四方由美「戦時下における性役割キャンペーンの変遷：『主婦之友』の内容分析を中心に」『マス・コミュニケーション研究』47号、1995年、111-126頁。
- 6) 若桑みどり『戦争がつくる女性像：第二次世界大戦下の日本女性動員の視覚的プロパガンダ』筑摩書房、1995年。
- 7) 右田裕規「戦前期「女性」の皇室観」日本社会学会『社会学評論』208号、2004年、129-145頁。
- 8) 石田あゆ「大正期婦人雑誌における女性・消費イメージの変遷：『婦人世界』を中心に」京都大学文学部社会学研究室『京都社会学年報』9号、2001年、55-74頁。
- 9) 前島志保「消費、主婦、モガ：近代的消費文化の誕生と「良い消費者／悪い消費者」の境界について」神奈川大学人文学研究所編『<悪女>と<良女>の身体表象』青弓社、2012年、116-198頁。
- 10) 石田あゆ「大正期婦人雑誌読者にみる女性読書形態：『主婦之友』にみる読者像」京都大学文学部社会学研究室『京都社会学年報』1998年、163-180頁。
- 11) 主婦之友社は、1922年に文化事業部を設置し、雑誌社主催の講習会、展覧会、コンテストを催し、全国巡業なども行なった。主婦之友社による読者参加型イベントをきっかけに、地元婦人会が形成されることもあった。1926年1月号の誌上倶楽部には、同社主催の音楽会をきっかけに大阪婦人会が設立されたことを知らせる投書が掲載されている。「大阪婦人会の会員達は（中略）美しく、立派な婦人の会合として、真をつくして、成長させてゆきたいと願ってをります。どうぞ、至らぬ私達を、これからもよろしくご指導くださいますやうに、お願いいたします」
- 12) 沖田信悦『植民地時代の古本屋たち：樺太・朝鮮・台湾・満洲・中華民国 空白の庶民史』寿郎

- 社、2007年。
- 13) 詳細は李相哲「満州における日本人経営新聞関係年表」『満州における日本人経営新聞の歴史』凱風社、2000年、38-332頁参照のこと。
 - 14) 同上、「付録1『満日』系譜図」364-366頁。
 - 15) 満洲弘報協会編『満洲の新聞と通信』満洲弘報協会、1940年。
 - 16) 偽満時期資料重刊編委会編『満洲國政府公報』遼瀋書社、1990年、14-19頁。
(「満洲國政府公報」第59号、大同元年10月24日、星期一、教令第103号：出版法)
 - 17) 貴志俊彦ほか編『二十世紀満洲歴史事典』吉川弘文館、2012年、110-114頁。
 - 18) 岡村敬二『満洲出版史』吉川弘文館、2012年、39頁。出版物数は、貴志(2012)による集計と岡村(2012)による集計によってかなりの隔りがあり、出版数や流通量の同定は困難であることがうかがえる。しかし、1937年を境に出版数が増加したことは両者に共通した見解である。
 - 19) 同上、18-19頁。満洲地域における文化振興策を指導していく機関として1920年に設立された。総裁は後藤新平、開庁に中西清一。満洲周辺地域の文化的・経済的調査・報告および出版・紹介・宣伝につとめることが目的とされた。後に、本協会は満洲文化協会と改称し、関東州内唯一の女子中学校である大同女子技芸学校の経営も行なっている。
 - 20) 同上、112-113頁。
 - 21) 同上、47頁。
 - 22) 満洲国通信社編『満洲国現勢 康徳6年版』満洲国通信社、1939年、465頁。満洲国建国以前は、満洲に流入してくる出版物の多くは中国からのものであったが、建国後は中国発行の出版物への取締の強化と満洲在住の日本人の急激な増加によって、輸出版物の大部分は日本からのものとなった。
 - 23) 前掲、『満洲出版史』78頁。
 - 24) 内務省警保局編纂『出版及著作関係法令集』日本新聞協会、1936年、135-138頁。
 - 25) 前掲、『満洲出版史』28-29頁。
 - 26) 前掲、『満洲国現勢 康徳6年版』466頁。
 - 27) 同上、『満洲国現勢 康徳6年版』466頁。
 - 28) 前掲、『満洲出版史』78頁。
 - 29) 岡満男『婦人雑誌ジャーナリズム』現代ジャーナリズム出版会、1981年、95-106頁。
 - 30) 主婦の友社『主婦の友社の五十年』主婦の友社、1967年、57頁。
 - 31) 前田愛『近代読者の成立』岩波書店、2001年、219-220頁。
 - 32) 講談社社史編纂委員会『講談社の歩んだ五十年』講談社、1959年。
 - 33) 主婦の友社編『主婦の友社の五十年』主婦の友社、1967年。
 - 34) 長谷川郁夫『美酒と華囊：長谷川巳之吉』河出書房、2006年、395頁。
 - 35) 政府の要請により、日本出版文化協会は解散し、より強制的な出版戦時体制を敷くために1943年出版会として再び設立された。
 - 36) 荘司徳太郎、清水文吉編『日配時代史 現代出版流通の原点』出版ニュース社、1980年、29-35頁。
 - 37) 『日配通信』1941年9月1日号、3頁。
 - 38) 主婦の友社に先立って、朝日新聞は1933年に地方版として満洲版を発行した。朝日新聞社は満洲支局として新京に支局を開設した。

- 39) 前掲、『主婦の友社の五十年』330頁。
- 40) 前掲、『日配時代』24頁。
- 41) 小数点以下は切り捨てた。
- 42) 『主婦之友』満洲版「在滿愛讀者の家庭の實驗 満洲の家庭の温い栄養料理十一種」（1943年新年号）冒頭の編集者コメント。
- 43) 「幸い馬鈴薯が澤山出廻る季節ですので、今月はこれを主食の補ひに工夫したものを主に取り出してみました。」（昭和18年7月号「満洲の家庭の栄養料理とお菓子の作り方二十四種」）、「決戦下の食生活に斷乎勝ち抜く決意で、在滿の皆様にも一そう積極的に節米を徹底させて頂きたいと思ひ、節米代用食を主に集めました。」（昭和18年8月号「満洲の家庭の節米栄養料理の作り方廿五種」）などの編集者による記述は、明らかにどの投稿記事をいつ掲載するのかということに編集側の明確な意向が反映されていたことを示している。しかしながら、何をどう書くのかについては投稿者／読者の裁量によるものであり、「書き方」に関して編集側からの要望が示された記述は管見の限り見いだせない。
- 44) 『主婦之友』満洲版、1943年2月号 北安省・副島静。
- 45) 同上、1943年2月号 ハルビン市・堀井かをる。
- 46) 同上、1943年3月号 新京市・藤多賀子。
- 47) 同上、1943年4月号 ハルビン市・堀井かをる。
- 48) 同上、1943年4月号 奉天市・平美佐緒。
- 49) 同上、1943年7月号 撫順市・藤井明子。
- 50) 同上、1943年9月号 北安省・佐野イチ。
- 51) 同上、1943年新年号。
- 52) 同上、1943年新年号「野鳥のカツレット」ハルビン市・堀井かをる。
- 53) 同上、1943年2月号「ベリミニイ」ハルビン市・堀井かをる。
- 54) 同上、1943年3月「北滿名物の雉子料理」通化省・村上綾子。
- 55) 同上、1944年1月「變りペロシキ」新京市・上田徳子。
- 56) 誌面において専門家のレシピを掲載するとは明言されていない。しかし、一般投稿者による投稿記事には、在住地及び氏名が明記されているのに対し、専門家のそれには氏名のみしか書かれていないこと、加えて、中国料理家の山田政平、西洋料理家の北川敬三、『家庭料理全書』金園社（1961）の著者宇野九一や『通學用通勤用栄養辨當の作り方』主婦之友社（1941）の著者の一人である吉田初枝の名前があることから、投稿記事内に専門家による記事が混在していると判断した。
- 57) 『主婦之友』満洲版、1944年9月号「野草の下拵へ」、「ぎしぎしの胡麻雑炊」、「よもぎだんご」、「アカシアの炒め物」大連市・浦田ます子
- 58) 同上、1944年5月号「楡の味噌汁」哈爾濱市・堀井かをる
- 59) 同上、1943年7月号 南滿・佐藤桂子
- 60) 同上、1943年新年号「廠元麩のスープ」新京市・藤多賀子